◉論　説

いまさら文革、いまなお文革、いまこそ文革

寧夏山間地回族の「二〇年間の大災厄」の記憶とイスラーム復興

松本　ますみ

本論では特に寧夏回族自治区の山間地に住む回族に焦点を当て、当地の宗教指導者、阿訇（アホン）と回族のイスラーム共同体にとって「二〇年間の大災厄」とは何だったのか概観する。さらには、一五〇年前の「陝甘回民起義」において「殲滅」「強制移住」させられるという惨苦と逆境の歴史と記憶の連続という文脈で考えることにする。本論で使用する資料として、各種の公的な資料のほかに、私家版の書籍を用いることにする。

一　中国イスラームの現状

中国全土を席捲した一九八〇年代の宗教的狂熱の時代は、一言で言えば宗教を否定した一九五八年から文化大革命の収束までという連続する二〇年間の苛烈な政治運動の反動であった。漢語を母語とするイスラームを信じる宗教的エスニシティ回族も例外ではなかった。回族は二〇一〇年センサスで約一千万人、中国では人口はチワン族についで多い「少数民族」である。中華民国時代は「回民」ともいわれた（本論では、時代や文脈によって「回民」という言葉も使う）。文革時代に破壊された清真寺（モスク）や聖者廟（ゴンベイ）の再建が進み、各地には緑色のドームを頂いたインド様式ともとれる清真寺が林立、付属のイスラーム学校も作られ、金曜礼拝には多くの人を集めている。八〇年代以降、二〇代の特に農村出身の回族青年は続々とイスラームとアラビア語を学ぶべく海外に出国した。彼らは帰国後イスラーム学校教師、通訳、貿易商など

を始め、二一世紀に入り、経済的大成功を収めた者もいる。その一方で、自らのアイデンティティのありかを求め、宣教活動を悩みつつ行う若者もいる。ともあれ、改革開放の果実は、確実に回族社会にイスラーム復興（現代中国では、「文化自覚」と言い換えられる）でも経済的面でもプラスの方向に変革をもたらした。[2]

しかし、本稿を執筆している現在（二〇一七年）、習近平主席下の中国では国際的「テロとの戦い」と協調するように、「宗教事務条例」が修正・施行され中国国内のイスラームは再度「敏感」な問題となっている。アラブ諸国からの客を見越して作ったアラビア語の案内板が「誤解を受けやすい」と当局の指示によって外されたり、イスラーム学校が非合法化され「地下」化したり、回族幹部は断食が禁止されたりしている。

さらには、二〇一六年ごろからインターネット上でイスラームや回族は「ヘイトスピーチ」の対象になっている。そのような書き込みに対する検閲や削除はその他の政治的な「敏感な問題」に比べて緩慢である。その内容は、イスラームは怖い、イスラームを奉じる回族やウイグル族は危険、[3]といった根も葉もないものだが、宗教を学校カリキュラムで教えぬまま欧米発のイスラーム原理主義のテロ事件をニュースで垂れ流す中国では、かなりジワジワと浸透している偏見だ。筆者が都市部の漢族の知識人に「回族の研究をしている」というと、多くが親切にも「危険ではないですか」「やめたほうがいい」というご注進までしてくれるというのが現状だ。イスラームが何か知らないし、興味や接点がない、回族に知り合いはあっても豚肉を食べないだけで漢族とほぼ同じ、でも何か遠巻きに他人事のように眺めている漢族知識人が多い。まして、一般の人々となると、どれほど中国共産党（以下、共産党）が「中華民族大団結」を掲げても回族が何故存在するのか知らない、というのが実情であろう。

中国においては完全なる信教の自由はなく、宗教は現在でも政府の厳しい「管理」下にある。中国内部と外部の情況に応じて「信教自由」の範囲の判断が拡大したり縮小したりする。特に、中国イスラームに関する研究で一番困難なのが一九五八年から文革終結にいたる足掛け二〇年間の検証である。回族はこの二〇年間を「二〇年間の大災厄」と呼ぶ。

二　中国における回族の文革研究の現状

㈠　先行研究

中国「少数民族」の中でも内モンゴルのモンゴル族の文革に関しては楊海英による大部の資料集出版と当事者への

表1　モンゴル族と回族の相違点と類似点

	ソ連との関係	過去、日本との関係	地方民族主義	先住性	言語は漢語と	宗教	教育程度	生産様式	偏見の対象
モンゴル族	あり？	あり	あり？(内人党)	あり	異質	あり	高い	遊牧	あり
寧夏回族	なし	［あり］	［あり］	なし	同質／異質	あり	低い	農耕通商	あり

注：［　］は全くのでっち上げで事実無根のことである。？は関係ありと嫌疑されたことを示す。

訪問調査研究によって、多くの業績があがっている。モンゴル族に漢族よりも多くの死傷者が出た理由を楊海英は、歴史的に醸成された遊牧民に対する中原の農耕民の蔑視観に加え、日本との協力と分離主義を画策した過去を問われ、体制存続のために危険な存在として捉えられたからとする。[4] モンゴル族全体がジェノサイドの対象となったからこそ、漢族に比べて高い死亡率となった。その意味で楊はモンゴル族の文革被害を漢―モンゴル間の民族問題という視点を取る。また、チベットの文革であれば、ツェリン・オーセルやゴールドスタインの著作[5]がある。では、「少数民族」の一つである回族はどうであったのか。

ここで簡単に楊海英の論文や著作に依拠して、モンゴル族が文革でジェノサイドの対象になった理由と寧夏の回族の性質を比較しておくと理解がしやすくなる（表1）。

表1で示すように、「少数民族」といっても、その居住地の地政学的重要性や開発可能性、政治的独立志向、歴史的相克、帝国主義国との関係、独自言語の有無、教育程度の高低等、かなりの違いがあることがわかる。モンゴル族は、漢族とは対立的で、中国国内の統一性を重んじる共産党上層部にとっては、まさに目の上のたんこぶ状態であった。文革時のモンゴル族への過酷な弾圧はこの文脈の延長線上にあった。しかし、回族が分離独立を望んだことがないのは歴史的にも明らかだし、中国への「愛国主義」も一部では根付いていた。それを理解したからこそ宗教・文化保護の一点だけで回族に対する「区域自治」という中国独自の民族理論を延安時代の共産党の理論家たちは考え付いた。[6] そうすると、モンゴル族とは別の理由での弾圧が存在していただろう、ということは想像にあまりある。

文革時代の回族の被弾圧を扱った先行研究には、人民解放軍が村を取り囲んで一斉に銃を放ち、九〇〇人以上（一説には二五〇〇人）が亡くなった雲南の沙甸事件の詳細を述べた馬萍[7]、短い紹介に楊海英[8]のものがある。また、人物伝では澤井充生のものもある。[9] 澤井の研究は漢語・アラビ

ア語のバイリンガルで、イスラーム解釈学で知られる北京の有名な阿訇、陳克利の伝記に基づく。陳克利は政治運動の嵐の中で「打倒」され、命を落とした。陳克利は死後、「平反」（名誉回復）され、現在はその漢語著作が復刻出版され、彼についての学術討論会が開かれるほどとなっている。

回族の間でも「打倒」により夥しい数の犠牲者が出た。しかし、「大にして分散し、小にして集中する」と称される通り、回族はすべての省、自治区に散らばって住む。全体の犠牲者数は算出されず、公式報告もない。特に文革では、「保守派」「造反派」「右派分子」の権力闘争が火種になって、焚きつけられた回族青年が反対派の回族を打倒したというケースも多い。漢・回の民族同士が仇殺する民族紛争というよりは、回族の内部の階級闘争やそれに乗じた積年の怨恨晴らしの様相を呈するものも多い。ただ、さまざまな文献を読む限り、ある一定の社会階層が集中的に弾圧のターゲットになったことは間違いがない。それが宗教指導者阿訇（アホン）と宗教学生満拉（モッラー）である。

㈡　回族研究　研究者の二重性

回族の文革研究の欠損と封印は、中国全体で文革研究自体がタブー化されていること、[10] 過去の民族問題を蒸し返し現代の民族問題に繋げるのを避けたい当局が「寝た子を起こさない」[11] という判断をしているのに加え、回族研究独自の理由が横たわっているからと思われる。それは第一に、回族知識人の二層性である。アラビア語・ペルシア語を使う知識人＝阿訇と漢語を使う大学での知識人＝研究者層が乖離している。両者の世界観の違いは大きい。宗教言語のアラビア語・ペルシア語で書かれたイスラーム経典を読み解釈し、イスラーム思想の極意をムスリム民衆に伝えるのが阿訇である。彼らは、絶対一者（アッラー、漢語では真主）という存在の本質、万物の創造、来世での永遠の命を得るために現世で善行を行う人間の使命を、経典に基づき民衆に説く。阿訇は共同体（ジャマーア）の安寧と一体感をもたらす精神的・社会的指導者でもある。しかし、阿訇は必ずしも漢語の読み書きが達者とは限らない。[12]

他方、大学等で回族を研究する回族の学者は必ずしもそれらの宗教言語を解さず、漢語（それと最近は英語）のみの識字者が多い。現在、回族研究は、漢語の高い読み書き能力をもつ大学院修了の高学歴者によってなされ、多くが共産党籍を持つ。共産党員は、マルクス主義の原則から無神論者であることが必須なので、[13] 礼拝、断食、髭、ヘジャブ着用などムスリムが遵守すべき行為はしない（ただし、豚肉は食さず、アルコールもタバコも嗜まない者が大半である）。大学院修了生は中国社会の中で階層上昇を目指すエリートである。学歴が高くなればなるほど宗教の内容と実践がわからない「名ばかり回族」が増える。[14] アラビア語

のコーランを学び、現世の厳しい日々の生活の中でも善行を積んで天国で永遠の命を得ることを夢見る、漢語半識字者の草の根の農民・商人とは生活形態も世界観も乖離する。[15]

「二〇年間の大災厄」の最大の被害者は、それら草の根の民衆からの絶大な信頼を誇った阿訇であった。世俗化した共産党員の回族研究者がイスラームに依って生きる貧しくも豊かな精神世界をもつ人々の世界観を根本のところで理解できるとはいい難い。何よりも党の「文革研究禁止」の方針に従わざるを得ない、というのが現状である。

第二に、回族研究の「新しさ」である。回族研究は一九五八年以降二〇年以上断絶した。二種類の知識人も逼塞を余儀なくされた。[16] 現在、三〇代から五〇代の回族に関する研究者のほとんどは回族の民族身分をもつ。彼らの恩師の多くもまた回族で六〇代から七〇代である。彼らは文革当時、公職を追放されていたか、下放されていたか、地元で兵役についていたりした文革の犠牲者か当事者である。彼らは混乱に巻き込まれた過去を学生に語らない。この世代は政治運動のため、青春期に礼拝や断食など日々の実践を含むイスラーム教義を学ぶ機会やアラビア語学習の機会を失した者がほとんどである。

そのためか、回族研究自体が、近い過去よりも遠い過去——清代、明代、元代、宋代、唐代——に自分たちのルーツを見出そうというものや、共産党の指導の「左の誤り」に抵触しない文献やオーラルヒストリーに依拠した研究が多い。

第三に、これが一番複雑なのだが、かつて文革で積極分子として清真寺の破壊や批判集会を指揮し阿訇に激しい暴力を振るった者たちが、改革開放後、すっかり「回心」して清真寺やイスラーム学校に醵金したり、毎日礼拝に来たりして「善行」を積んでいることである。確かに、宗教には改悛を促し罪を赦す作用がある。また、近所に住んでいたり、職場の同僚であったりもする。「赦す」ことが宗教の本質ならば、イスラーム復興が進めば進むほど、文革について共同体で話にのぼることは少なくなる。多くの人々が澱のような記憶を封印しつつ「あれは間違いだった」、傷のかさぶたをはがすな、と片付け、言葉を濁す。

㈢　筆者の限界

筆者も、民国時代の文献研究と平行して一九九九年に初めて寧夏の農村に入り、それ以降、二〇一〇年代前半まで断続的に甘粛、寧夏、青海、雲南、山東などの回族の草の根の人々、特に女学（民間のイスラーム女子学校）に集う女性たちに聞き取りをしてきた。多くが改革開放後に初めて識字能力をもった若年層であった。[17] 文革中はおろか何百年もの間、識字機会がなかった彼女たちは、宗教言語のア

ラビア語と母語の漢語双方の読み書き能力を歴代の一族の女性の中で初めて身につけることができた。イスラーム的清廉潔白さの本質を識字によって知り、やっとイスラームの伝承者となることができると、その表情は自信に満ち明るかった。筆者自身も目の前のイスラーム学校、清真寺の運営やヘジャブを被って礼拝する子どもたち、草の根の回族社会の敬虔さ、おかれた自然環境の厳しさ、宗教教育と公教育との矛盾という諸現象に気を取られ、年配の阿訇やその妻から反右派闘争から文革までのことを聞き取ることはできなかった。妻たちは、根強い家父長制の影響からか、家族以外の前に出ることをためらった。

当時は、「二〇年間の大災厄」のトラウマを乗り越え、前向きに生き、過去を蒸し返さないという暗黙の雰囲気があった。破壊された清真寺を再建し、労働改造に出されていた阿訇を呼び戻し、サダカ（喜捨）を集め、イスラーム学校を建設し、学生にアラビア語経典を用いた宗教教育を行い、宗教実践を復活させ、残忍な暴力と他者嫌悪といった文革時代に地に落ちた倫理観を取り戻し、「アッラーへの服従と平和の再構築」という美徳を高く掲げ、信頼関係を取り戻そうという機運が強かった。言い換えれば、「二〇年間の大災厄」期に失われた有形無形の文化遺産と、ムスリムとして、人間としての矜持を取り戻すための活動が随所で見られた。

㈣　ある阿訇の語り

筆者は寧夏に隣接する甘粛省臨夏回族自治州の女学の創設者を訪問して話を聞いたことがある。同氏はX阿訇（一九三三年生まれ）、D寺に所属している。この清真寺は六〇〇～七〇〇年の歴史がある。文革で破壊されたあと、一九八六年に再建された。同年、X阿訇は男子のためのイスラーム学校と女子のための女学を作った。彼は次のように語った。

一九五八～五九年の宗教制度改革で、阿訇の自分は批判され、六二年まで三年間労働改造所に送られた。阿訇だけでなく、清真寺で学んでいた一二、三歳の満拉の少年も全員労働改造所にやられた。肉体労働はきつく、食事の配給もなく、食べ物がなくてみな野草や土を食べてバタバタと餓死した。労働改造所から戻ってこられた人は少なかった。労働改造中は、「清真言」（シャハーダ。「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒なり」という信仰告白）を心の中で唱えていた。自分は臨夏郊外の労働改造所に送られたが、そこから動くことは許されなかった。自分は生還できたが、夥しい数の阿訇、満拉がイスラームの道を伝えることもできず亡くなってしまった。

文革時代には、紅衛兵が臨夏の清真寺をほぼ全部壊

した。臨夏は中国の小メッカとも呼ばれた場所だが本当にひどかった。紅衛兵（回族、漢族）はこの地方出身者だった。文革の時は闘争集会ばかりで、生きるだけで精一杯だった。あまりにもひどい迫害を受けたので、阿訇の中には文革が収束し「平反」された後もまた同じことが（共産党によって）繰り返されるのではないかと恐れ、結局、清真寺に戻らず農村で亡くなった人もいる。その一方で、二〇年間もずっと労働改造所で重労働をさせられ、辛酸を嘗め尽くすも、「平反」後、清真寺に戻った阿訇もいる。

私が一九八六年に学校を作った目的は、「勧人行善、止人幹反」ということだ。イスラームの教えに従い、善人を育て、人倫に悖る行為を諌めたかったからだ。（文革以前存在すらなかった）女学を作ったのはイスラームが教える男女平等と人のあるべき姿を伝え平和を実現させたいと思ったから。（男性優位社会に育った）男性阿訇の中には女が付け上がるとろくなことがないと女性教育に反対する者もいたけれど。（二〇〇六年九月、二〇〇七年九月面談。括弧内、筆者）

X阿訇は労働改造所に送られたときに、二五歳。年齢的にやっと宗教指導を行えるようになった歳である。以来、四〇歳半ばまでイスラームを語ることも実践することも適わなかった。彼が強調したのは、多くの優秀な阿訇と満拉が「餓死した」という残忍な事実である。

しかし、彼らは、「二〇年間の大災厄」をアッラーからの試練と受け取り、苦境を耐え忍ぶことをアッラーの教える「ジハード」と捉えていた。[18] 諺に「回民能吃苦」というものがある。回民はどのような苦労をも厭わない、と。それは、度重なる体制による苛烈な弾圧や、降雨のない、酷暑と厳冬の極端な気候、地味が薄くはげ山だらけの苛酷な自然環境の中で、貧困にめげず、挫けずに謙虚さと感謝をもって生き抜くことで篤い信仰が保たれるという彼らの生き方を示している。

信仰は弾圧されればされるほど、伏流水が噴出するように表出する。そして、その延長線上に改革開放後のイスラーム学校と新しい女学の設立があった。そこには、歴史的に無学な状態に押し込められた女性に、イスラームの真髄を教えることで、家庭内にイスラーム的雰囲気をかもし出し、子どもたちに無神論者に囲まれた脆弱な回族の存在の証である信仰を守ることを教え、回族社会そのものの生き残りを託そうというしたたかな戦略があった。[19]

㈤ 宗教教育への政府の介入と文革の更なるタブー化

このイスラーム復興の動きも二〇一〇年代に入ると急速にブレーキがかかった。サダカによって運営され学費がほ

とんど無料か低廉で、年齢も学歴もまちまちなどのような子どもでも受け入れたイスラーム学校の多くが、政府によるカリキュラム支配を受け、マルクス主義関連科目を教えるようになった。教員の「質」――師範教育を受けているか、漢語の読み書きは完璧か――が厳しく問われるようになり、従来のアラビア語だけが抜群にできる、宗教知識も豊富というような教師は放逐された。根底には、二〇〇五年の義務教育九年制の施行が影響している。そこには世界の大国となった中国が一〇〇％の識字率と就学率でもって、世界に冠たる科学技術大国・文化大国をめざそうという面子をかけた教育重視の方向性も当然存在している。しかし、その識字率と就学率の中には、回族の子どもの保護者からの要望が強かったアラビア語識字能力と民間のイスラーム学校は入らなかった。

さらに、近年は「宗教事務条例」の強化により、筆者が申請してもイスラーム学校の訪問が許可されなくなった。他の外国人研究者も同様という。規準に合わないイスラーム学校の多くが閉鎖を余儀なくされて「地下化」したり、[20] 宗教色を消した「職業専門学校」に看板を付け替えたりしている。文革も、イスラーム学校も、イスラーム復興もすべてタブーという形で蓋をしたいというのが、執筆時点（二〇一七年）の状況である。

三　限られた資料から読む

㈠　公的歴史の極小化、曖昧さ　県志、州志

少数民族に対する文革期の凄惨な暴力や人間の尊厳の剥奪という事実の「極小化」は、中国の民族政策理論の専門書でも常態化している。例えば、民族理論と政策研究の集大成ともいえる金炳鎬編『新中国民族政策六〇年』[21]では、本文全五六四頁のうち、反右派闘争から文革期の記述は全部で二六頁、すなわち四・六％に過ぎない。もちろん、楊海英[22]やツェリン・オーセル[23]が描いたモンゴルやチベットにおける凄惨な暴力の発現とその原因については描かれない。いずれも、淡々と事実を挙げ、「全て四人組の仕業で、党の「民族団結」の方針が捻じ曲げられ混乱した」と著すのみである。ちなみに、あとの九五％の記述は、民族区域自治を核とした中国共産党の民族政策の自画自賛に終始している。

一九五八年から文革の二〇年の記述の欠損は、信仰深い回族が「内部資料」として交換するミニコミ誌（例えば、甘粛の『開拓』や『穆斯林婦女』）から、中国伊斯蘭教協会発刊の雑誌『中国穆斯林』、回族集住地区各地編纂の『文史資料』、『中国回回民族史』（白壽彝編、中華書局、二〇〇九年）、『中国回族史』（邱樹森編、寧夏人民出版社、

二〇一二年）といった公的な文書・研究書まで徹底している。特に、「回族史」とは、一九四九年までの歴史とするというのが、一定の学界の了解事項となっている。

県志のいくつかに「二〇年間の大災厄」の記事は散見するが、数行の説明に留まっている。例えば、回族が多い寧夏同心県の『同心県志』（一九九五年）は次の通りである。

一九五八年上半期に、全県で開学阿訇は二五四人いた……。寺住み込みの満拉は三八三人であった。食事つきが八四人、食事なしが二九九人であった。一九五八年八月の中央統戦部『関於在回族中改革宗教制度的意見』規定の中の一〇項目目が「阿訇、満拉が労働せざる制度」を排除せよ、というものだった。大部分の満拉は学問をやめ、生産に従事、一一月の調査では、全県の満拉は三五人に減った。一九六六年「文化大革命」が始まると、宗教活動は全て「封建迷信」として禁止、経書は「四旧」として焼かれ、清真寺は破壊あるいは他目的に転用され、経堂教育は停止させられた。[24]

中国の「小メッカ」、甘粛の『臨夏回族自治州志』は次のように簡単に記す。

一九五八年、「左」の間違いにより宗教工作は破壊された。宗教特権と封建に反対する闘争で、全州でほとんどの清真寺と仏教寺院は破壊あるいは転用された。動乱中、誤りが拡大し、無辜の民衆と宗教人士が逮捕、家宅捜索され、労働改造に送られた。民衆の宗教活動は大弾圧を受けた。一九六一年の西北地区第一次民族工作会議と一九六二年の全国全省民族工作会議では、誤りを訂正し、寺の一部を開放した。（ところが）文化大革命では、（再度）「左」の誤りにより、建国以来の党の民族工作の方針と成果が否定され、宗教工作は取り消された。宗教問題を政治問題化したことで、信教は禁止され、文化大革命前に（からくも）開放されていた一九〇の清真寺は破壊もしくは閉鎖された。一六七名の阿訇は全員追い出され、宗教人士の多くが「牛鬼蛇神」として打倒され「専政対象」となった。（括弧内、筆者）

臨夏はさきほどのX阿訇が「二〇年間の大災厄」を経験した場所である。県志、州志という公的な記録が、大量の不自然な「死」と暴力を隠蔽もしくは過小評価している。何よりも、打倒対象となった人々と家族の心の傷を描かないし、「左の誤り」を誰が発動し、どのように末端の人々を動かし暴力の下手人としたのか明らかにしない。自然災害のように責任の所在を明確化しないのが、公的な文章の特徴である。

㈡　何兆国の論文にみる二〇年間の大災厄

それでも、寧夏におけるイスラームの状況に関しては一

九九八年段階で寧夏回族自治区統戦部に所属していた共産党幹部何兆国（一九三三年生まれ、回族）による二本の論文[25]は、少しは詳しく述べている。以下、王希恩の著作[26]で補い、寧夏の「二〇年間の大災厄」のアウトラインを示そう。何兆国の論文には極端に参考文献が少ない。本人が幹部として知りえた内部資料や記憶に則って書かれているからと考えられる。ただ、県志や州志と同様、責任の所在を明記していない。以下、〔　〕内は筆者が補ったものである。

一九五八年、中央統戦部が青島で「回族イスラーム教問題座談会」を開き、宗教制度改革が話し合われた。宗教は〔民衆に〕封建的圧迫を行う搾取制度であるので、是正すべく民主改革を行うことになった。搾取制度とは、教主〔スーフィー教団のムルシド〕が一般教徒に口喚という宗教指令を出すことや、〔各家庭からサダカやザカートなど喜捨（学糧という。現物支給が多い）を受けて食べ、コーランを読み教え説教するのみで食糧生産という肉体労働をしない〕阿訇の存在や〔喜捨の集め方・分配の仕方が不透明と思われる〕清真寺の管理制度や、清真寺が不動産・動産〔土地、家畜、森林など〕を所有していることや、教主が一般教団構成員を（教団の維持のため）無給労働させるといった負担制度のことをいった〔すなわち、宗教は漸次消え去るべき、という考え方に則ると、宗教勢力に騙された民衆の宗教負担は過大なので、社会主義国家の生産力向上に貢献しないという判断に基づく〕。

また、〔阿訇が慣習に反するとして〕自由結婚に干渉したり、〔家父長制度が残るムスリム社会では〕女性蔑視が強かったり、子どもに〔コーランの言語のアラビア語を学ばせる〕宗教教育を「強制」することも「封建」に含まれた〔すなわち、共産党の指導の優越を伝える漢語の読み書きを学ばせず、アッラーを最上の存在とする価値観を次の世代に伝えるということを問題視した。共産党の指導の無謬性に危機をもたらしかねないものだったからである〕。〔阿訇に搾取されているとされる貧農の〕回族の宗教負担を軽減するという口実で、〔自分で食べる分を労働によって生み出すため〕阿訇や満拉を〔慣れない〕農、林、牧畜業等の生産活動〔すなわち労働改造〕に参加させ、清真寺から追い出した。

その端緒となったのが、一九五八年夏の馬震武の「極右分子」認定であった。馬震武は、「門宦」（スーフィー教団）ジャフリーヤ派の教主（ムルシド）だった。〔教主は教団の一般教徒には絶大な影響力、カリスマ性と求心力を持っていた。その影響力を見込んで〕、一九四九年以降、共産党政権は、彼にさまざまな公職を与えてきた。それを覆し、一〇月一七日付『人民日報』社説は、(1)かつて日本と協力し西北に「清真国」（回回国）という独立国建設を

画策した、(2)国民党と結託し、人民解放軍による解放の阻止を試みた、(3)共産党政権を転覆しようと、反革命叛乱を組織し、寧夏地区に回族共和国を作ろうとした、などとでっち上げの罪状を述べたてた。そして、馬震武をすべての公的役職から追放した。[27]

それと呼応して、民衆の宗教活動は停止させられ、清真寺も阿訇もほとんど破壊・打倒された。「宗教界の反革命分子、悪質分子、右派分子を排除・反対する」という闘争の中で、大混乱が起こった（図1）。〔豚は教義上のタブーであることを知りながらわざと〕強制的に回族民衆に養豚させたり、〔教義上、髭を蓄えることが奨励されているのに〕髭を剃らせたり、女性の髪を切ったり、「蓋頭」（ヘジャブ）を脱がせたり、[28]死者を包む布の使用を禁止したりした。「四類分子に強制的に豚を飼わせる」という方針のもと、回族の集落の中で養豚会議が開かれ、阿訇に子豚を抱かせて写真を撮ったり養豚模範なる制度を作ったりした。

当時、宗教人士はすべて右派、悪質分子のレッテルを貼られ、特権と搾取を剥ぎ取るべしとされた。阿訇が固原で数万人規模の人々を扇動し叛乱を企てているとか、その中心は清真寺であるとか出鱈目を捏造し、阿訇は追われ、民衆は信仰を捨てさせられた。宗教は「人民のアヘン」で「階級の敵が利用する道具」「社会主義建設のためにはまず宗教批判から」というスローガンが繰り返され、社会の「不用品」とされた。宗教人士は「搾取階級」として反動分子認定され、労働改造所に送られた。清真寺の破壊が進み、一九五八年以前には寧夏には清真寺が一八八〇あったのに、一九六六年の時点で一一四と一〇％以下に減ってしまった。宗教活動は非合法化された。

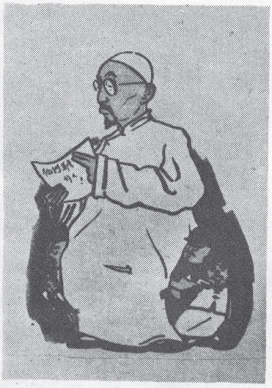
一九六一年と六二年の「関於民族工作会議的報告」で締め付けは多少緩和されたものの、一九六二年末にはまた「投降主義」「修正主義」との批判が出始め、一九六四年に中央統戦部部長の李維漢が批判されると、再び「牛鬼蛇神」を捕まえよという声が高まった。四清運動と結びつけ、当時の自治区の統一戦線部長の肝いりで、呉忠の東方公社は、人々がいかに宗教勢力に苦しめられ搾取されてきたのかを訴える試験場となった。難癖言いがかりをつけて〔いままで〕人民政府と協力してきた上層阿訇たちを名指し批判し、阿訇に民衆の目前で宗教批判・自己批判させ、しまいには自治区全体の宗教関係者を「おびき寄せて」、「国際共産主義運動が宗教問題を解決するための経験」をさせた。それが学習班という名の労働改造〔という重労働〕で、〔労働改造所に一家の大黒柱を送られた一家は、働き手をなくし〕財産を使い果たし困窮した。[29]

文革期の一九六六年の「農村社会主義教育運動」では、イスラームは「地主党」とレッテルづけされ、回民地区は民主革命を行う対象とされた。「宗教問題は階級問題であり、

不許利用宗教進行非法活动
坚决废除一切封建特权和封建剝削

保護人民的宗教信仰自由，团結、教育、改造一切爱国守法的宗教界人士，肃清在宗教界中的反革命分子，反对宗教界中的右派分子和坏人坏事，廢除封建特权和封建剝削，这是党和政府的堅定不移的方針，只有采取这个方針，才能在宗教界分清敵我界限，守法和違法的界限，有利于团結人民和打擊敵人，有利于发展我国的社会生产力，促进社会主义經济和文化事业的繁荣和高漲。

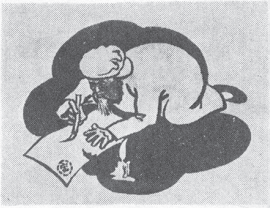
——摘自1958.10.17.人民日報社論“堅决肃清伊斯兰教界中的敗类”。



“教主”馬重雍，利用宗教包庇反革命，被他放为阿洪的反革命分子馬付官已被政府逮捕法办。

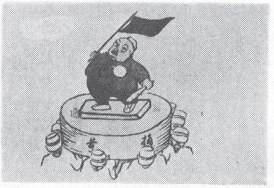
反革命分子金子常是馬震武的忠实走卒之一。抗日战爭時期，他奔走于敵伪特务机關，并曾去日本从事出卖祖国的罪恶勾当。

极右分子馬震武解放后一再策劃反革命武装叛乱，最近又想搞“伊斯兰教民主党”，成立什麼“宁夏地区回族共和国”達到他所謂“坐四十年天下”的目的。



反革命匪首馬紹文一貫玩弄两面手法，表面上拥護党和政府，暗中密令其爪牙組織叛乱，反对共产党。

右派分子兰秀斋处处假借宗教破坏国家政策法令，如公然主張回民男18、女15岁可以結婚。还阻止回民青年向政府机關領取結婚証。



所謂“教主”馬騰霄，貪婪成性，利用各种各样名义搜括錢財，剝削教下群众。

用洗澡水当“圣水”騙錢，这是匪首馬孝利用宗教勒索群众的手法之一。

号称大阿洪的馬順天，經常利用教派斗爭殘害群众，据揭露，先后被他打死的就有120多人。

（以上各画均选自甘肃省伊协編絵的漫画材料）

図１　「不許利用宗教進行非法活動、堅決廃除一切封建特権和封建剥削」
『中国穆斯林』1958年12月

宗教矛盾とは階級矛盾で、社会主義革命建設事業では宗教に闘争を仕掛けなければならない。階級闘争の観点では宗教はいつもコントロールし、弱体化させ、消滅させる対象である」（自治区党委六三号文件）と宗教否定がより厳しい形で提示された。[30] 宗教は帝国主義と国内反動階級、反社会主義が利用する道具で、封建主義、資本主義が忍び寄って合法的に復権を図るための道具にすぎないとされた。

阿訇に民衆の前で宗教批判させた所もあれば、実験的に「無宗教県」「無宗教州」と指定され、全員に強制的に宗教を捨てさせた所もあった。宗教活動は「非法」、「スパイ」、反革命活動扱いされ、回族の積極分子を動員して宗教を取り消しさせた。

文革期は、宗教は「存在しなくなった」「歴史博物館入りした」と決めつけられ、「四旧一切を打ち負かせ」というスローガンのもと、全国の清真寺、ゴンベイが閉鎖・破壊されるか他用途に転用された。墳墓も掘り返され、大量の経典や文史資料も焼かれるか散逸した。[31] 宗教とは迷信として禁止され、宗教用品も溶かされるか破壊された。回族の多くは信仰のせいで差別、迫害され、反革命分子の判決を受けた。養豚奨励は引き続き行われた。回族が九六％を占める涇源では、養豚会議が開かれ、「四類分子には強制的に豚を飼わせる」政策が推進された。豚を飼うことは、回族の入党のための踏み絵とされた。[32] 阿訇たちは一様に「牛鬼蛇神」とされ、引き回されて辱めを受け、家宅捜査され、強制移住させられ、多くの冤罪を引き受けさせられ、殺された者も多かった。[33]

㈢　世紀の愚業　豚の飼育

世界史のどこを見渡しても、ムスリムに豚の強制飼育をさせたのはこの時代の中国以外にはあるまい。中国史上、回民と漢人の敏感な食生活の問題は両者の間にくすぶり存在したが、努力によってその解決も図られてきた。中華民国時代、回民が豚を食べないのは、回民の先祖は豚であるからであるとして貶める「侮教事件」が起こった。怒り狂った多くの回民はそのような記事を出した出版社に押しかけ、掲載雑誌は廃刊にされた。[34]

豚肉を食する漢人に囲まれて生活していても、回族は絶対に豚肉は口にしない。漢族レストランには行かず酒は飲まない、たとえ清真寺には行ったことがなくても、というのが常識である。だからこそ、「二〇年間の大災厄」の時代の狂乱と異常さが際立つ。さまざまな暴力や人格否定、宗教否定の中で最悪の侮辱行為が、ムスリムに対する養豚強制であろう。このような異常事態には次のような理由が考えられるであろう。

まず、毛沢東思想にすべての人が統一化されなければならない、例外は反革命・右派で、徹底的に排除されなけれ

ばならない、という唯一の価値観のもと、文化や価値の多様性を認める寛容さや包容力を当時の共産党中央が欠き、人々が何も考えずに盲従して全体主義的状況に陥ったことが、前代未聞の殺し合い、人間の侮辱、ハラスメント、相互不信、サディズムを繰り返させたことであろう。さらには、世界の数億のムスリムを敵に回すかもしれないという想像力を欠いた国際認識の浅さも問題であろう。

特に、反右派闘争の暴力を見て育った子どもが、一〇年後の文革期に紅衛兵となって暴力に加担したのは、運動にかこつけて暴力で私憤を晴らすことすらも正当な行為とされていたからだ。そして、何よりもその当時の最高倫理は「毛沢東思想への盲従・忠誠」であったのだから、伝統宗教が教える「寛恕」「アッラーへの忠誠」「善行」の思想などは「四旧」として唾棄すべきものとして地に落ちてしまったのだ。

特に、一九六六年から一九七二年まで、「養豚は回族の革命」「回民が養豚をするか否かは進歩の印」とされ、地方幹部は強制的に回族に豚肉を食べさせ養豚させた。養豚は生産を発展させ国家建設を進めるのだから、養豚に反対する者は反革命で、養豚を破壊する者は革命の破壊者とされ、養豚は階級闘争の中に数えられた。そのような中で、積極的に養豚に関わる回族民衆も出て、表彰を受ける者もあらわれた。養豚は「毛沢東思想の偉大な勝利」とまで言われた。実に、寧夏の生産隊の九〇％以上の戸で養豚が行われた[35]。生き残るためとはいえ、なんという屈辱であったろうか。

このようなことが起こった背景には、小さな宗教共同体の中に、共産主義者という楔が打ち込まれ、究極の監視社会と制裁としての暴力の是認の出現があったことが挙げられるであろう。人々が恐怖心や服従心、狂信と悪意に駆られて相互監視活動を行い、個人的あるいは階級的怨恨を暴力で晴らすことが奨励された。特に、当時の回族の造反派は、暴力を奮うことが賞賛されることで自分たちの正しさが証明された。いまや社会的弱者となったかつての尊敬の対象の社会的階層阿訇がどうなってもよいし、宗教指導者とその知識は唾棄すべき「四旧」というわけだ。「積極分子」は弱い他者を支配することで優越感・万能感を保つことができた。これは、ナチス時代のユダヤ人差別や、障害者差別と通底している[36]。

満拉といわれる宗教学生たちは、家が貧しすぎて清真寺であれば食べられる、と預けられた貧農階級出身者が多かった。彼らが艱難辛苦の末、十数年毎日続く学習を終えて阿訇となっていけば、共同体の結束と安定は図られた。そのような阿訇を出した家族は信仰深いとおおいに尊敬された。満拉の存在は、宗教的共同体が次の世代にまで存続していくための鍵であった。しかし、階級区分で阿訇が

「搾取階級」と認定されてしまえば、誰もその予備軍の満拉にならず、教師もおらず、若者は歴史から分断され、世俗化と暴力、そして毛沢東主義という反知性主義への誘惑に抗することができなくなる。共同体の安寧と存続を図る鍵であった清真寺での教育制度も人としてのモラルも灰燼に帰したことになる。

文革後、被害者は「平反」されたかもしれないが、養豚と豚食を強制させられた上に、回族の者も大いにその強制に関わっていたという恥辱は消えうせることはない。また、それを指令した行政機構や実行者が厳しく責任を問われているわけでもなければ再発防止策がとられているわけでもない。すべては、政策決定者の裁量権の範囲内で起こる。だからこそ、豚以外の締め付け――イスラーム学校の制限、アラビア語文字看板の制限、公的場所でのヘジャブの禁止、ラマダン月の断食禁止等――は、文革収束から四〇年たった現在も突然何の前触れもなく起こる。

㈣ 寧夏、山間地回族の「二〇年間の大災厄」中間まとめ

以上、公開された資料に基づいて寧夏の「二〇年間の大災厄」をまとめてみると次のようになるだろう。

(1) 宗教関係者は多くの場合貧民であったが、すべてでっち上げの罪を着せられ「階級の敵」「右派」あるいは「地主」と断罪され、弾圧された。それには「宗教はアヘン」「労働しない者は反革命」との共産主義者の考えが反映された。また、文革期の惨状は、一九五八年から始まった宗教弾圧の焼き直しで、根本的に二〇年間連続していた。

(2) 阿訇と一般民衆を分離させ、敵対させ、一方的に憎悪させ、阿訇を追放した。両者をつなげた信仰と共同体を否定すると同時に、髭やヘジャブを否定し身体的侮辱を加え、精神的拠り所である清真寺を破壊し、養豚を強制し、歴代の宗教学生たちが連綿と書写して継承してきたコーランの写本を含む貴重な経書をことごとく焼却し、宗教教育を再生不可能なまで断絶させ、精神的侮辱を与え、彼らの人間としての矜持を破壊した。特に、政策決定者はムスリムが何をタブーとするのか熟知した上で意図的に嫌がらせを行った。そこには、共産党の指導よりも上の絶対的な価値「アッラー」と、教義の解説者である阿訇の精神的指導性と彼らが持つイスラーム知識全体を跡形もないように抹殺しようという意図があった。

阿訇は「ごみ」のように人格を否定され、労働改造の場に捨てられた。その結果、宗教文化知識の継承が途絶し、宗教的エスニシティとしての回族の意味づけがほぼ否定された。さらには、回族の中にも「積極分

子」という若年層の暴力肯定派が育てられ、分断が加速した。清代以降権力者はいつもムスリムの強大な凝集力を恐れてきたが、内部の結束を破壊することで、共同体（ジャマーア）が破壊され、宗教の弱体化が進み、宗教を通した人の繋がりが弱まり、人々がアトム化し、多くが名ばかり「回族」として、党と国家に接続された。

(3) 無神論者のほうが、宗教を信じる者よりも優越・進歩しており、遅れた者に対する指導性を持っていると認定されることで、混乱が拡大した。信仰を捨てない「弱者」をモノ化し、あらゆる「攻撃」「いじめ」「ハラスメント」が許され、横行し、権力者がそれに積極的に加勢した。また、階級闘争という暴力の連鎖の中で、人々の人権感覚が麻痺していくが、それは、命令する党の方針に絶対服従することが美徳であるという考えに支配されていた。「二〇年間の大災厄」中、人間は人間であることを停止させられていた。ものを考えることは許されなかったのである。

四　陝甘回民起義、虐殺と強制移住の記憶

二〇〇〇年に発動された西部大開発以前は、寧夏の西海固（西吉、海原、固原）といえば、中国の代表的な貧困地帯であった。降雨量は少なく、雪解けの水を水瓶にためて煮炊きに使うような自然環境の厳しさであった。横穴式住居であるヤオトンに住み、見渡す限りの赤茶けた禿山の中腹にわずかな段々畑を開き、細々と耕すのが日常であった。生活条件の厳しさの理由として「二〇年間の大災厄」の混乱も挙げられよう。が、それ以前に、彼らは、清末の陝甘回民起義に連なるものとして、陝西から強制移住を強いられた者の末裔でもある。では、その歴史を概観してみよう。

一八六二年に陝西・甘粛省の回民（現在の回族）が、蜂起した。いわゆる陝甘回民起義（一八六二－一八七七）である。原因は次のようなものである。第一に、清朝が回民に対して差別的な政策を行ったこと。第二に、地元の漢人と回民が差別や風習の違いをめぐって諍いになったときにも公平な裁判を怠ったり、差別を放置したりしたことなどである。[37] 流言飛語にも煽られ、蜂起は瞬く間に燎原の火のように広がった。レジスタンスは回漢の間での凄惨な殺し合いに転じ、それを鎮圧する清軍は左宗棠の指揮の下、徹底的殲滅作戦に出た。

左宗棠は「以回制回」[38]という民族分断政策をとり、回民側投降者を使って回民の大量殺戮を誘導した。殲滅には英国から輸入した近代銃器も投入された。陝西省には、回民は一八五〇年代に一七〇万人を数え、全省の一二・三％の

人口を占めたが、一八六二年以降六、七年間で一五五万の回民が「消失」した。死亡（戦死、焼死、餓死、凍死、病死）したか、新疆や甘粛に逃亡したか、強制移住させられ、全省で一五万人にまで減った。人口減少率は実に九一・四％にのぼる。人口比で劣る回民は結果的にほぼ根絶やしにされてしまった。現代用語でいう「ジェノサイド」に相当しよう。男子で一二歳以上六〇歳以下の者はすべて殺害された。生存を許された者は老人女性子どもだけで、信仰と命をつなぐために、清朝の提示した「安挿」「安置」策を受け入れた[39]。

「安挿」「安置」という言葉は清朝側が使ったものであるが、二重の意味を含んでいる。わずかに生き残った者の生存を権力者が恩恵として許可するという意味と、「叛乱」を起こす可能性がある「危険な」回民を生きても死んでも構わないという意図のもとに主要な舞台から強制的に消滅させ厳格に管理することで、権力側は二度と叛乱に怯えずに「安心」できるという意味である。左宗棠は「先剿後撫」（先に殲滅し、後に救済する）政策のもと、いわゆる「善後」安置を実施した。

「善後」も紛らわしい言葉である。ここでも、何よりも体制の安泰が第一の目的であった。「善後」とは、分化、すなわち、生き残った回民を四方八方の遠隔地に移住させるということで、具体的には陝西省中心部に住んでいた回民を陝西、寧夏、青海、新疆各地の辺鄙な場所に移住させ、二度と強大な力の凝集が起きないようにすることであった。紛争を避けるため漢民との雑居も避けた。移住後の居住地は大きな山や河に面さず、幹線道路から遠からず近からずの権力側が管理しやすい土地が選ばれた。さらに、移住後、回民は一〇戸ごとに監視の連帯責任をとらされ、移動の自由を奪われ、鋤や鍬などの生産道具の所有も制限された[40]。

このように同治年間（一八六二―一八七四）に「善後安置」政策のもと、現在の寧夏の南部山間地の一地方である涇源に陝西から着の身着のままで移住させられた者は、回民だけで一万六〇〇〇人にものぼった[41]。レジスタンスのために立ち上がり敗れた彼らは、理不尽にも鎮圧され、殺し尽くされ、家と清真寺も焼かれ、土地も没収され、一家離散した。長く苦しい徒歩での道のりの果て山奥の辺境の地にたどり着いた彼らは狼の襲撃と飢餓と貧困と病気と夏の暑さと冬の寒さに苦しみつつ、命を永らえ現在の当地の回族の祖先となっていった。

厳しい自然環境と食うや食わざる貧困。いつも危険な「被疑者」として権力者から監視対象となる中、誇り高く生き抜くため、人々はいつも信仰にその生存と刻苦勉励精神の根拠を求めた。イスラーム信仰は、「安挿」されて厳しい異郷に身をおきつつも耐え忍び生き延びた回民の矜持

の拠り所となっていった。

そのような彼らの強制移住先に約六五年後、新たな統治者としてやってきたのが人民共和国の地方政府であった。古老ならば、まだ虐殺と強制移住の記憶がある時代のことである。そして続けて起こったのが「二〇年間の大災厄」である。

すなわち、寧夏の山間地の回族の人々は、回民起義に伴う清朝官憲による大虐殺、焼き討ち、強制移住、貧困の連鎖、そして「解放後」の「二〇年間の大災厄」を一連の受難の出来事として記憶している。いずれの史実の中でも、回民が回民を撃つという民族分断の構図が権力者によって意図的にとられ、それが各教派や門宦（スーフィー教団）間の相互不信を繰り返し増幅させた。さらに、地上の権力者には武力では絶対歯向かえない、歯向かうと殲滅される、という恐怖心の中で、体制への「自発的隷従」がエートスとなったことは確かである。しかし、それでも弾圧の嵐が過ぎ去ると彼らが必ず行ったのはイスラーム復興活動である。清真寺を再建し、イスラーム学校を建て、阿訇を招聘し、子どもにアラビア語を教え、イード（ラマダン終了を祝う祭りと犠牲祭）やアマル（聖者を讃える祭り）を開催し、ということを黙々と繰り返してきた。

水も燃料も衣服もない、食糧もぎりぎり、政治的な圧力＝共同体抹殺の危機がいつ来るかわからないという厳しい環境で、来世への信仰がなければ人間は生き抜けるものではない。そしてそのような環境こそが、寧夏の南部山間地回族の団結心を育ててきた。文革で跡形もないように破壊されつくした共同体は改革開放後、不死鳥のように復活した。

そして、このような中で、「二〇年間の大災厄」の実情を自らの足で調べ始める人も出てきた。

五　『中国経堂教育與陝学阿訇』にみる亡き阿訇への鎮魂

㈠　本の紹介

今回、資料として主に使うのは、回族社会で静かに広く読まれている内部資料の著作である。

これは哈吉・黄登武という人物が編纂した『中国経堂教育與陝学阿訇』という全五七三頁、四〇万字以上（二〇〇九年甘粛平涼発行）の自費出版本である。一六世紀以来の中国イスラーム教育と阿訇の系統が綿々と記されており、その系譜が示す時空の広がりに驚嘆させられる。しかし、資料的価値があるのは、その系譜よりはむしろ、一九五八年から文革終結までの二〇年間に阿訇たちがどのように「烈士」「舎習徳」（シャヒード。イスラーム信仰のために

犠牲となったもの）となったのかについての経緯と記録である。中には、労働改造や暴行にもめげずに生き残り天寿を全うした阿訇の伝記も残されているが、多くが暴力や飢餓に耐え切れずにあるいは意図的に殺害されてこの「二〇年間の大災厄」中に命を落としている。

著者の哈吉・黄登武は、中国のイスラーム界では知られた人のようである。「哈吉（ハージュ）」とは、メッカ巡礼を済ませたものの称号である。黄登武は一九三九年平涼生まれ、この本を出した段階で七〇歳であった。一九四九～一九六一年に学生としてイスラーム学校や普通学校で学んだが、一九六二年から一九九四年まで労働改造で農村に三〇年以上暮らした。一九九五年から一九九六年、平涼緑色希望行程基金会の会長のかたわら、平涼アラビア語学校をつくった。二〇〇一年から、意を決し八年間かけて自費で中国各地を廻り、自らのイスラーム思想のルーツを辿る旅の中で、「二〇年間の大災厄」で命を落とした何十人もの阿訇の話を周囲の人々から聞き取り、この本の中に編みこんだ。

数々の阿訇の具体的名前や経歴、学識の豊かさ、そして暴力を受け死亡するまでの経緯が詳細に描写され、読むものを震撼させる内容である。あるものは、漢人と同じ釜の飯を食べることを拒否し絶食して餓死、あるものは労働改造中、食事を供給されず餓死、あるものは批判集会でも罪を認めず獄中死、あるものは一二日間連続の拷問後死亡、あるものは井戸に身を投じて死亡、あるものは批判集会と引き回しの後に死刑、あるものは獄中の屈辱に耐えかねて自刃、あるものは重労働に耐えかねて城壁から飛び降りて自殺、ある八〇歳を超える阿訇は、労働改造で一日中鉱石運びをさせられ、石の重さに耐えかね圧死、あるものは錬鉄工場での重労働と食糧難の中で餓死……。いずれも、「アッラーは偉大なり」「アッラーよ」「アッラーの存在を信じる」と最期まで叫び続け、「カーフィル」（不信心者）、「ドゥシュマン」（敵）の圧力に屈しなかった精神の壮絶な「戦い」が描写され、どの人たちも「シャヒード」（殉教者）と讃えられている。一人ひとりの人生、積み重ねてきた人徳と学識が、そして人間の尊厳がいとも簡単に権力によって潰されていったことが克明に記されている。しかし、二〇年間の大災厄に関しては、現在もこのような内部発行のような本にしか記録を許されていない。

㈡　灰条溝事件と弾圧された阿訇

その中で、ほんの一例に過ぎないが、寧夏の南西山間地の海原県で起こった事件について述べてみよう。海原も、回族がほとんどを占める地域である。

この事件は文革中の一九六八年六月一九日、海原で起こった。当時、宗教活動は反革命、陰謀、暴乱であり、サダカは反革命活動経費とレッテル付けられていた。造反派

はたった三日間で海原の六七の清真寺と三つのゴンベイをすべて壊した。髭、お下げ、ヘジャブは禁止され、人民公社では回族向けのかまどが廃止され、回族の養豚が奨励されていた。そのような中、事件が起こった。

アマルという、聖者を祝う祭りが開催され二〇〇～三〇〇人の回民が集った。二頭の羊をほふって皆に配っていた。その時、数台の車に乗りこんだ武装警察がやって来て、空に威嚇発砲、流れ弾も飛んできた。彼らは「反革命の馬生祥を探せ」と叫んだが、探しきれず、離れた所でしゃがんでいた民衆に無差別発砲、三人が死亡した。民衆はみな恐怖のあまり、冤罪をそそぐこともできなかった。海原県の革命委員会はこの事件を取り上げず、殺人者の責任も追及しなかった。

灰条溝事件以降、海原県の革命委員会は、教民のアマルの参加は反革命陰謀暴乱を企図したもので、付近の農村の阿訇がその主犯であると決めつけ、罪名をでっち上げ、証拠を捏造し、十数名の阿訇を逮捕した。罪名は「封建宗教迷信を利用して反革命活動を狂暴にも行い、反革命勢力を育て、反革命陰謀暴乱集団を組織し、反革命行動計画をたて、来たる四〇年の間天下を取るために、無産階級専政を転覆しようとし、無産階級司令部を誹謗し、人々の財物を掠め取り、貧農下中農を攻撃し、革命を破壊し、階級闘争を破壊し、生産を破壊した」などという荒唐無稽ぶりであった。海原革命委員会の主任で県長の石道儒（漢族）が数十人の阿訇の銃殺指令書にサインをした人物だった。その指令で銃殺された者のうち何人かの具体的最期は次のようなものだ。

(1) 楊如徳阿訇（一九二〇－一九七〇）

彼は文革中も海原で後述の馬生祥阿訇と一緒に宗教活動を続けようとしたのが仇となり、灰条溝事件以降、「反革命陰謀暴乱集団」の主犯として捕らえられ、獄中禁固二年の刑をうけた。阿訇は罪を認めず、暴力を振るわれ続け、棍棒でたたかれたり焼きごてを押し付けられたりなど残忍な刑罰を加えられた。ありもしない罪状をでっち上げられ、反革命陰謀叛乱集団の主犯として楊如徳阿訇は死刑を言い渡され即執行された。楊阿訇が処刑されたとき、顔はメッカの方向の西を向いて倒れた。現場にいた人たちは、彼が高い声で「アッラー」と言って倒れたのを聞いた。

(2) 田成仁阿訇（一九〇七－一九七〇）

一九六八年六月一九日の灰条溝事件後、「封建迷信を広め、陰謀暴乱集団に参加し、無産階級専政の転覆をたくらんだ反革命分子」との罪名で田成仁阿訇に逮捕状が出た。阿訇は自分の家のヤオトンの後ろの小さく真っ暗なヤオトンにじっと身を潜め、一日中コーランを唱え、断食をし、礼拝し、二年近くほとんど日の光を浴びなかった。二年間工作組と村幹部は家宅捜索を続け、阿訇を出せ、と迫っ

た。一九七〇年初め、阿訇は生と死の問題は自然に任せるべきと考え、勇気を出して暗い穴から出てきた。「六十歳を過ぎたが、罪を犯したことはいまだ一度もない」と考えたのである。当日、民兵が阿訇を連行して行った。工作隊は、ヤオトン中を引っ掻き回し、ひそかに隠していた荷車二台分の経書を引きずり出し、村の広場で公開で焼いた。逮捕の日は、息子や孫も軟禁された。獄中では殴る蹴るのむごい折檻を「ドウシュマン」(敵)から受けた。四〇日後、農暦三月二四日(西暦四月二九日)に田阿訇は銃殺された。銃殺の時、ずっとアッラーと叫び続けていた。埋葬のとき、遺体には腹、下半身、太ももの内側に多くの焼きごての跡があり、いかに酷い拷問を受けたかがわかった。彼は、極悪非道なカーフィル(無神論者)と少数の信仰を失った叛教者(回族)を軽蔑していた。

⑶ 馬生祥阿訇(一九三五―一九七〇)

前述の田阿訇の弟子で、信仰の危機の時代に教義を守ろうとした。文革中でも、各戸を廻って教義の宣伝をし、「善事を行い、悪事は為さぬよう」と説教し、コーランを読んで聞かせていた。農業合作化の時代、集団生産こそが善事とされたので、彼の行為は却って悪事とされ「反革命組織」に連なると断罪された。彼は文革は間違いであると常々いっていたので、密告者に陥れられた。

一九六八年六月一九日以降、馬生祥阿訇は官憲が自分を逮捕に来るというので、人々に勧められるまま隣村の民家に二か月間隠れていたが、アッラーの導くままシャヒードになることを決意し、決然として世間に出て逮捕を待った。一九六八年八月のある日、逮捕され、獄中で二年近く身体じゅうに焼きごてを当てられるなど拷問を受け、阿訇が暴乱組織を組織したことを認めさせられようとした。阿訇は、アッラーを胸に、何も自白しなかった。一九七〇年農暦三月二四日、五人の阿訇とともに海原県の広場に連れて来られてさらし者にされ、それから川原で銃殺された。

⑷ 安克明阿訇(一九二二―一九七〇)

安阿訇は馬生祥阿訇と同級生で、田阿訇のもとで学んだ。一九六六年、灰条溝事件に連なるとして罪名をきせられた。一九七〇年二月二四日、家にいるところを大隊に連行され逮捕された。でっち上げられた罪名は「解放後匪と通じ、匪を匿った。反革命陰謀叛乱活動に参加し、積極的に計画を練った」というものであった。安阿訇は反革命陰謀叛乱集団の中心的人物として即死刑執行を言い渡された。敬虔にもアッラーの道に則って生きた阿訇は「大極悪の罪」を犯したと決めつけられた。

残虐な折檻と焼きごてでの拷問を受けたあと、三月二四日に刑場に押しやられた。安阿訇は引き回しの車の上で「アッラーフ・アクバル」(アッラーは偉大なり)と叫んだ。軍警は黙らせようと銃剣で阿訇の口を切りつけた。阿

訇の顔と口はくずれ落ち、歯は砕かれ血が滴った。阿訇は凶悪な敵の前でも勇敢不屈に首をもたげ胸をはって無上のアッラーを唱え続けた。阿訇は決然として刑場に向かった。敵が二発うったあと阿訇は倒れた。

著者の黄登武は次のように嘆息を交えながらまとめる。

「このような価値観がまったく逆転し、人間性は獣と化し、白は黒と言いくるめられ、冤罪を訴えることができない時代に、処刑されシャヒードとなった阿訇たちはイスラームの崇高な精神を発揮し、勇敢にも何も恐れず、大義の在り処を厳然と示した。シャヒードの精神でもって自らの信仰を完璧にした。自分の血と命で、イスラーム信仰の尊さを守ったのである[42]」。

このような高邁な精神を持った人々の物語が綿々と語り継がれるからこそ、中国のイスラームは何度弾圧されてもそのたびごとに息を吹き返してきたのだ。

まとめにかえて

回族の「二〇年間の大災厄」とは何だったのだろうか。結果から言えば、徹底的な宗教否定の末に、漢族への同化＝社会主義化＝無神論へと誘われ、宗教的共同体の解体を進めようとした時期のことだ。そして、それは今でも宗教知識と伝統の欠損という形で大きな爪あとを残している。

筆者自身は、改革開放以降、寧夏の回族の人々に細々と話を聞いてきた。「二〇年間の大災厄」について何も語らない、言葉を詰まらす、という人のパーセンテージは、漢族の友人のそれよりも多い印象である。漢族の友人の多くはこういう。「あの時代は、皆そうだったんですよ。どの民族もそうだったんですよ。みんな気がおかしくなっていたんだ。誰も止めることができなかったんですよ。私だって、下放でひどい目にあっていたんだ。牛馬のような生活をさせられたんです。痛みわけですよ」。そうなのだろうか、と思う。回族の人々の重い沈黙には、上部の命令に従ったとはいえ、人々が回族の信仰と尊厳とエスニシティの拠り所とした阿訇を殺し、貴重な経典を焼却してしまった、あるいは誰も止めることができなかった、そして同じ回族が暴力に加担したという重い自責の念が存在する気がする。先祖が連綿と伝えた教義、文化遺産を自分たちの世代でほぼ無にしてしまったことに対して一番それを直視することが辛いのは多くの犠牲者を出した阿訇たちなのだと思われる。

社会主義中国で、イスラームという宗教を生まれながらに引き受けている回族であるが、生き抜く方法はただ二つである。第一は、「名ばかり回族」として宗教を知らず、清真寺にもいかず、漢族と伍して世俗化し現世利益を求め

ることである。第二は、ムスリムとしての誇りを胸に、宗教教義に則った生き方を選び、漢化をよしとせず、来世を信じて実直に生きることである。実際、現在の回族は世俗化と宗教の間で引き裂かれており、「豚肉を食べないだけ」「名ばかり回族」も急増中である。

寧夏の山間地の回族の共同体はそれでも、世俗化を拒んだ。文革後、二〇年間以上もコーランを詠んでいない、勉強もしていない老阿訇や、若いときにちょっと勉強しただけ、という四〇代の中年になった阿訇を探してきて、サダカを出し合って清真寺を再建した。焼かれた写本の経典の代わりとなったのが改革開放後海外からもたらされた経典のオフセット版であったり、手作りのガリ版刷りの教材であったりした。二〇年の空白を埋めるべくまるで罪滅ぼしのように人々がせわしなくイスラーム復興活動に動いていた二〇〇〇年代、筆者は幸運にも宗教活動に邁進する回族に遭遇することができた。出会う人みなムスリムとしての誇りに満ち溢れていた。

寧夏山間地の回族は二度の災厄にあったと記憶している。第一回目が、陝甘回民起義後の殲滅と強制移住。第二回目が「二〇年間の大災厄」である。災難があっても弾圧があっても、いやそれだからこそイスラーム的に義(ただ)しいことをするのだ、という「伝統」を彼らは継承しようとしている。

一般に、戦争犯罪に関しては三つのことをする必要がある。第一に、因果関係を含めた事実の認定、第二に謝罪と賠償、第三に再発防止策を講ずることである。「二〇年間の大災厄」に関して、第二の謝罪賠償に関しては、中国政府は「平反」という形で行っているが、第一の事実認定と第三の再発防止策はどうなのだろうか。二〇一〇年代以降、三回目の災厄は来るのだろうか。来ないことを願うのみである。

注

〈1〉 阿訇（アホン。ペルシア語でākhund）とは、中国以外では学者（ウラマーulamā、アーリムālim）ともいわれるイスラーム宗教指導者で、宗教的エスニシティ回族のジャマーア（共同体）を束ねる精神的支柱ともなっている。イスラームに関する知識を豊富に有するゆえに、学者として尊敬の念をもって教民に接される。コーランやハディースを初めとし、多くのアラビア語、ペルシア語の注釈書を読み、解釈し、金曜礼拝にはそれらの知識に基づく説教を共同体の人々にする。信仰に従い、いかにして「善く」生き行動すべきか、それによって来世で永遠の命を得るのかを説くのである。経堂という学校（マドラサmadrasa）は、コーランを詠み、アッラーが人間に遣わした人生の指南書、宇宙の構造を理解できるようにまずアラ

ビア語の読み書きを子どもに教える場所である。

阿訇は宗教的エスニシティ回族が数百年間中国社会の中で漢族社会に同化せず生き残る鍵となった文化伝承者・発展者である。その意味で、阿訇は「道を知る人」として、唯一の創造の神アッラーを信じ、謙虚で尊厳ある生き方を求めた貧しい回族民衆の尊敬と憧れの的であった。だからこそ、中国共産党が長征で西北の回族と邂逅したときに、阿訇を味方につけて金曜礼拝で共産党の擁護の説教をしてもらうことを第一義としたのである。拙著『中国民族政策の研究――清末から一九四五年までの「民族論」を中心に』多賀出版、一九九九年、三〇三―三一八頁。

〈2〉 先行研究に、拙著『イスラームへの回帰――中国のムスリマたち』山川出版社、二〇一〇年、奈良雅史『現代中国の〈イスラーム運動〉――生きにくさを生きる回族の民族誌』風響社、二〇一六年、奈良雅史「遍在する「周縁」を動く回族」澤井充生・奈良雅史編『「周縁」を生きる少数民族――現代中国の国民統合をめぐるポリティクス』勉誠出版、二〇一五年などがある。

〈3〉 例えば、次のような「中国で一番危険な民族は回族」などという回答 https://zhidao.baidu.com/question/3299583959314704 45.html（二〇一七年一一月九日閲覧）。

〈4〉 楊海英『ジェノサイドと文化大革命――内モンゴルの民族問題』勉誠出版、二〇一四年。

〈5〉 ツェリン・オーセル『殺劫――チベットの文化大革命』藤野彰・劉燕子訳、集広舎、二〇〇九年、メルヴィン・ゴールドスタイン、ベン・ジャオ、タンゼン・ルンドゥプ『チベットの文化大革命――神懸かり尼僧の「造反有理」』（楊海英監訳、山口周子訳）、風響社、二〇一二年。

〈6〉 拙論「回族とは何か」中国ムスリム研究会編『中国ムスリムを知るための六〇章』明石書店、二〇一二年、三六―四〇頁。

〈7〉 馬萍「解放軍による沙甸の大量殺戮」宋永毅編『毛沢東の文革大虐殺――封印された現代中国の闇を検証』松田州二訳、原書房、二〇〇六年。

〈8〉 楊海英「沙甸村の殉教者記念碑」『中国21』Vol・37、二〇一二年、二二七―二三四頁。

〈9〉 澤井充生「「右派分子」からシャヒード（殉教者）へ――反右派闘争・文化大革命に翻弄された宗教指導者」澤井充生・奈良雅史編、前掲『「周縁」を生きる少数民族――現代中国の国民統合をめぐるポリティクス』二一七―二四六頁。

〈10〉 一九八〇年代の早い段階に、鄧小平の指示により文革を語ることはタブーとなった。その理由について徐友漁は次のように指摘する。「文革は中国共産党が中国の人民にもたらした災難であり、文革について批判すれば、自ずと「まさか、毛沢東ひとりに責任を負わせるのか、私たちの制度にどのような問題が生じたのか」と問うことになる」。すなわち、一党独裁体制を揺るがしかねない問題を文革はらんでいる。徐友漁「文革とは何か」明治大学現代中国研究所・石井知章・鈴木賢編『文化大革命〈造反有理〉の

現代的地平』白水社、二〇一七年、四〇頁。

〈11〉 楊海英「強盗の論理を「奴隷」の視点から読む――『チベットの文化大革命』の背景と性質」ゴールドスタインほか、前掲『チベットの文化大革命』三三八頁。

〈12〉 Masumi Matsumoto, "Secularization and Modernization of Islam in China: Educational Reform, Japanese Occupation and the Disappearance of Persian Learning." In Jonathan Lipman ed., *Islamic Thought in China: Sino-Muslim Intellectual Evolution from the 17th–21st Century*. University of Edinburgh Press, 2016, pp. 171–196.

〈13〉 金炳鎬主編『新中国民族政策六〇年』北京：中央民族大学出版社、二〇〇九年、五三二頁。

〈14〉 石舒清『西海固の人々――中国最貧地区に住む回族の暮らし』徳間佳信訳、勉誠出版、二〇一四年、二八〇頁。

〈15〉 北京からの下放青年であった張承志は中国西北でスーフィー教団ジャフリーヤ派の人たちと心を通わせ、その隠された伝承に基づき『心霊史』（一九九一年）と、一九世紀の被弾圧と教主の秘蹟を描く民間のアラビア語・ペルシア語文献の漢語訳である『熱什哈尓』（一九九三年）を出版した。普通であれば邂逅するはずのない北京の知識青年と食うや食わずだが豊かで深遠なる精神世界を持った草の根の人々が文革時代、西北農村で出会った。深い精神世界は知識青年張承志の魂を揺り動かし、その漢語識字能力で、ムスリム民衆の世界観が世の中に紹介された。これは奇跡的なことであったと言える。

〈16〉 一九四九年前後に漢語識字者のムスリム知識人の多くは、国共内戦で国民党とともに台湾に渡った。大陸に残った者は、五八年以降にほぼその研究活動を停止させられた。一九三〇年代にカイロのアズハル大学に留学しコーランを漢語に翻訳した北京大学の馬堅（一九〇六－一九七八）や、回族史・中国通史を編纂した北京師範大学の白壽彝（一九〇九－二〇〇〇）がその代表である。

〈17〉 拙著、前掲『イスラームへの回帰――中国のムスリマたち』。

〈18〉 例えば、ある匿名の民間作家は書く。「自分の父親は迫害を受けて牢につながれた文革時代に自分を弾圧した人のことを恨まず、息子たちにその話をしなかった。このことは子どものころは不思議だったが、成長して、それはイスラーム信仰に由来しているのだとわかった」（陝海青「河州漢子」『回回有泪不軽弾』臨夏：甘粛臨夏市穆斯林文化服務中心、二〇〇一年、一〇一頁）。すなわち、現世での行動（恨んだり、復仇心をもったりすること）を戒めることが、来世での永遠の命に関わるという思想である。

〈19〉 拙著、前掲『イスラームへの回帰――中国のムスリマたち』六七－六八頁。

〈20〉 二〇一七年八月二六日布告の国務院「宗教事務条例」では、外国の影響を一切受けないこと（第五条）、中国政府はすべての宗教機関・教育機関に政府部門での登録をするように要求している（第七条）。また、宗教学校の教員の質も厳しく定めている（第一六条、第一八条）など、宗教

信仰をより「中国化」＝「中国共産党の管理下におくこと」を求めている。http://www.gov.cn/zhengce/content/2017-09/07/content_5223282.htm（二〇一七年一一月一日閲覧）。

〈21〉 金炳鎬主編、前掲書。

〈22〉 楊海英『墓標なき草原――内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』上・下、岩波書店、二〇〇九年。楊海英、前掲『ジェノサイドと文化大革命』。

〈23〉 ツェリン・オーセル、前掲書。

〈24〉 『同心県志』編委会編『同心県志』寧夏人民出版社、一九九五年、六七四頁。

〈25〉 何兆国「建国以来伊斯蘭教工作的回顧與再認識」『寧夏大学学報』№43、一九九〇年、何兆国「寧夏四十年来伊斯蘭教工作的経験與教訓」『寧夏社会科学』№89、一九九八年。

〈26〉 王希恩主編『二〇世紀的中国民族問題』中国社会科学出版社、二〇一二年。

〈27〉 段徳智『新中国宗教工作史』人民出版社、二〇一三年、九九－一二四頁。

〈28〉 何兆国、前掲「寧夏四十年来伊斯蘭教工作的経験與教訓」。

〈29〉 同右。

〈30〉 同右。

〈31〉 「寧夏の涇河原、黄花、恵台の三つの人民公社だけで、五千冊以上のコーランが焼かれ、家宅捜査の末、イスラーム経典はすべて没収されて一箇所に集められ焼かれた。各村では手で書写した、あるいは外地から艱難辛苦の末運ばれ、蒐集されてきた歴代の貴重な経典に火が放たれて上空高くまで煙がたなびいているのがしばしば目撃された」（拝学英編著『涇源回族史略』上、寧夏人民出版社、二〇〇九年、二〇一頁）。

〈32〉 王希恩主編、前掲書、四九〇頁。

〈33〉 何兆国、前掲「建国以来伊斯蘭教工作的回顧與再認識」。

〈34〉 矢久保典良「侮教事件――中国近代史上の回漢対立」前掲『中国ムスリムを知るための六〇章』二四八－二五二頁。

〈35〉 拝学英編著、前掲書、二二五－二二八、二四四－二四五頁。

〈36〉 ウェンディ・ロワー『ヒトラーの娘たち――ホロコーストに加担したドイツ女性』武井彩佳監訳、明石書店、二〇一六年、三七頁。

〈37〉 拝学英編著、前掲書、四－一〇頁。

〈38〉 張中復『清代西北回民事変――社会文化適応與民族認同的省思』台北：聯経出版、二〇〇一年、一一二、一三三頁。

〈39〉 路偉東「清代陝西回族的人口変動」『回族研究』№52、二〇〇三年。

〈40〉 拝学英編著、前掲書、一〇二－一〇三頁。

〈41〉 同右書、一〇五頁。

〈42〉 黄登武編著『中国経堂教育與陝学阿訇』平涼：自費出版、二〇〇九年、五〇六－五一七頁。